

〔実践記録〕

特別支援教育を核として教師力を高め合う学校づくり
2年目の仕事

東近江市立八日市北小学校
校長 上野 芳樹

要 旨

発達障害や家庭的な問題等が原因で学校生活に不適応を示す子どもたちの問題が年々増加している。そのことに起因して学級全体が落ち着きを失ったり、保護者からのクレームも増えたりして、教師が疲弊してしまうという状況がある。

こうした状況を克服するためには、授業力・学級経営力など「教師力」の向上を図るしかない。その追求の切り口を私は「特別支援教育」に求めた。学びに困り感を持つ子どもの視点から我々の指導を改善することは、課題をもつ子どもも含め、どの子どもが生き生きと学べる学級づくりにつながるはずだからである。

昨年度、そうした理念のもとに学校経営を進めた。その成果と課題を踏まえ、2年目の取組をまとめたのがこの記録である。

I 実践テーマ設定の理由

II 運営組織の再編

- ・昨年度の成果と課題
- ・校務運営組織の再編 ～「学年部会」の創設と「一役一人制」の導入～

III 実践のあゆみ

1. 学びやすい教室環境の整備（構造化）
2. 学年部会での実践交流
3. 特別支援教育とリンクさせた授業研究の推進
 - ・授業研究の事例① 「特別支援教育の専門家を講師に招く」
 - ・授業研究の事例② 「一人一授業 私の授業」
4. 特別支援教育主任からの情報発信
5. 特別支援教育支援員の実践に学ぶ

IV 取り組みの成果と今後の課題

V 終わりに

I 実践テーマ設定の理由

「学びに困り感をもつ子どもたちをどう支援し、指導するか」

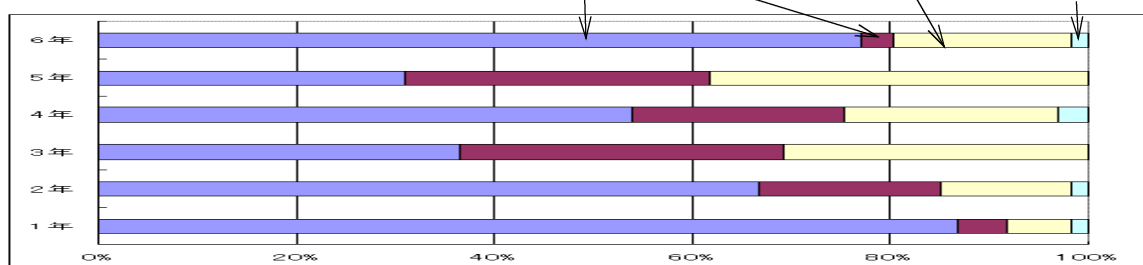
これが、昨年度から今年度へと続く本校の重点課題である。

何らかの発達上の課題があると見られる児童が在籍児童のうち約10%いる。加えて、家庭的な問題を背景に「学び」から逃げる子どももいる。各学級に数名は「学びに困り感をもつ」子どもたちがいる。落ち着いていたはずの学級が、数名の子どもの動きによって学級崩壊状態に陥ってしまったりもする。

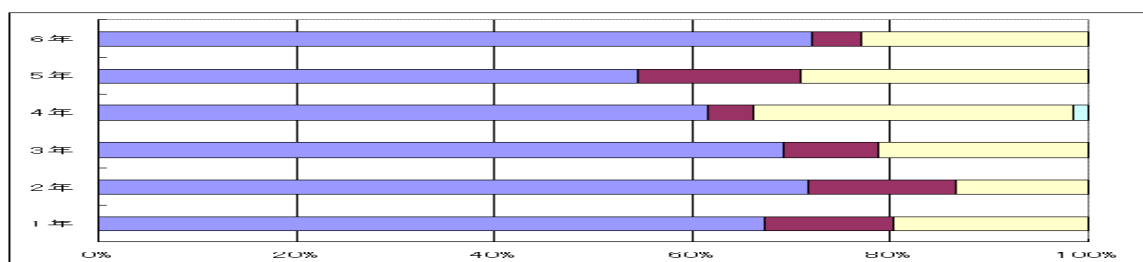
こうした現状を克服する学校組織をどう作り、どう機能させるか。それが、校長である私に与えられたテーマだった。

そもそも、子どもたちが学校生活で安定したり崩れたりする根本の原因は何だろうか。下のグラフは今年度の子どもによる学校評価結果である。

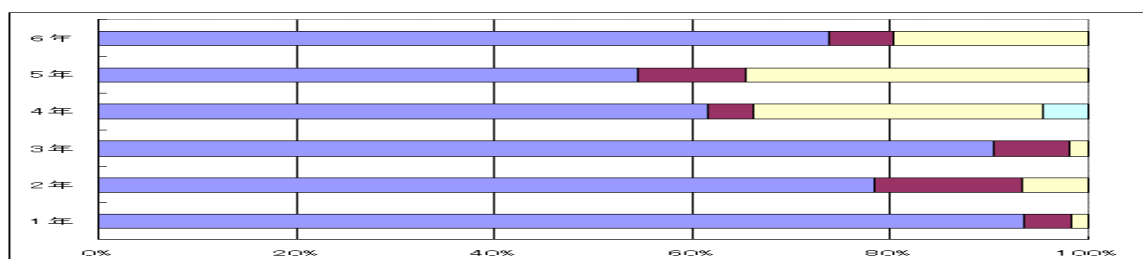
■ あなたの学級はいごちがいいですか。(はい いいえ どちらともいえない 無回答)



■ あなたは、授業がよくわかりますか。



■ あなたは、一学期より勉強がよくできるようになってきたと思いますか。



「学級のいごちの良さ」と「勉強がよくわかる・できる」こととがほぼ重なり合っている。かつて、学級崩壊の危機から立ち直った若い講師が「子どもって、勉強が分かってくると落ち着いてくれるんですね。」と語ってくれたことがあるが、その言

葉どおりであることをこのデータは示している。

どの子どもが分かる・できるようになる授業づくりを全教職員で取り組めば必ず子どもの姿は変わる。単純だが、学校教育の大原則である。そんな学校を創るためにはどうしたらいいか。私は、その追求の切り口を特別支援教育の実践に求めた。

発達障害の子どもたちは、「強制」には従わない。「納得」と「わかる・できる実感」がなければ動こうとはしない子どもたちである。そんな子どもたちの心にも届く指導のあり方を追求することは、すべての子どもたちに対してよく分かり学びやすい授業づくりの追求につながる。教師の指導からこぼれていく子は「困った子」ではなく「困っている子」なのだと思えなくなったとき、必然的に我々の意識は自分たちの指導改善の方向に向かうだろう。特別支援教育を切り口として、教師の自己変革・学び合い高め合う教職員集団づくりを具現化すること。それが私の学校づくりのテーマであった。

II 運営組織の再編

昨年度の3学期、それまでの学校経営について私自身で評価してみた。

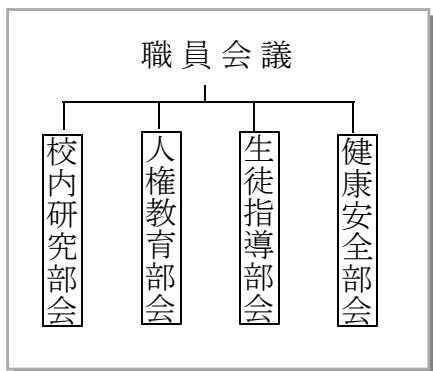
■昨年度の成果と課題

昨年度は、次の5つを柱に取り組んだ。

- ①発達障害児童生徒への指導力向上事業(4～9月末 計5回訪問)
事業テーマ「一斉学習場面における個別支援のあり方」
- ②校内研究と特別支援教育のリンク
授業研究に発達障害児の視点からの分析も加える。子どもの側から教師の指導のあり方を見つめ直す。
- ③特別支援教育総合推進事業巡回相談
「発達障害者支援センターいぶき」の田代先生巡回指導(年3回)
- ④日常的な実践交流
日々の指導の中で見つけた手だてを全体の実践に広める。
- ⑤情報発信
特別支援教育に関する諸情報の職員への提供

①・③・⑤については確かな成果を得た。問題は②・④である。授業研究が教師自身の変革につながるものには成り得ていない。また、日々の指導について、同僚間の学び合いが弱く全体的な実践になりきっていない。そこをどう改善していくかが今年度の課題である。私は、そう整理した。そして、それらの課題を克服するために、今年度の運営組織について、次のような再編案を職員に提案した。

■校務運営組織の再編 ～「学年部会」の創設と「一役一人制」の導入～



昨年度の校務運営組織は左図のようになっていた。各部会の取組状況を見ると、例年どおりの取組を基本として、そこに部分的な修正を加えて計画立案するというふうであった。そのかなりの部分は担当主任からの提案で済むのではないかと思われた。四部会を廃止し、職員会議への諸提案は各主任に責任を持たせた一役一人制とすることにより、懸案の「日々の授業・指導について同僚間で学び合う場」を設ける

ける枠ができるのではないかと考えた。

そこで、昨年度末の学校評価の際、「四部会」の廃止と「一役一人制」、同僚間の学び合いの場としての「学年部会」の創設を提案した。

| |
|---|
| 【重点目標】 みんなにやさしい「特別支援教育」の推進 ～学習や人との関わり方に困り感を持つ子どもの視点に立つ学習指導・生徒指導・学級経営の追求～ |
| 《具体的方策》 ・学びに困り感を持つ子どもの視点に立つ学習指導・学習形態の工夫 ・人との関わり方に困り感をもつ子どもの視点に立つ人間関係力を高める指導の工夫 ・特別支援教育の組織的推進 ケース会議・運営委員会・学年部会 |

| 部会 | 授業研究部会 | 特別支援教育推進部会 | 人権教育部会 |
|------|--|---|--|
| 取組目標 | ◎学びに困り感を持つ子どもの視点に立つ学習指導・学習形態の工夫 | ◎特別支援教育の組織的推進 | ◎人との関わり方に困り感をもつ子どもの視点に立つ人間関係力を高める指導の工夫 |
| 取組内容 | ・授業研究の年間計画立案 ・授業改善に関わっての諸提案 （学習環境、教材・教具、授業展開、教師の対応等） ・実践事例の集約 ・実践記録集作成 | ・個別支援の必要な児童の把握とその対応 ・個別的教育支援計画、個別の指導計画の活用についての協議 ・子どもを語る会運営 ・交流学習、障害児理解教育の取組 ・発達障害についての情報発信 ・親の会との連携 | ・「なかよし集会」「ともだち集会」の企画 ・グループエンカウンター、アサーショントレーニング等についての研修企画、情報発信 |
| 部員 | 研究主任 低・中・高 教頭 特支 | 特別支援C 養教 低・中・高 校長 | 人権教育主任 低 中 高 教務 |

| 学年部会 | | | |
|------|---|---------------|---------------|
| 取組目標 | ◎同僚間の学び合いを深め、学級・子どもの課題について、具体的な指導の手だてを得る | | |
| 取組内容 | ・各学級の状況を知り、課題を共有する ・課題ある子の指導についての事例検討（VTRの活用） ・各学級での取組を出し合い、有効な手だてを共通実践する ・各部会からの提案について、その具体的な取組を協議する。 ・ミニ研修（特別支援教育、教科の指導等） | | |
| 部 | (低) | (中) | (高) |
| | 1.2年 特支 校長 | 3.4年 特支 教頭 | 5.6年 特支 教務 |

部会の廃止には慎重論もあり、協議を経て左図のように再編することになった。

重点目標追求に特化した三部会と、具体的な実践交流の場としての学年部会を月1回、定例で開くよう年間計画に組み込んだ。

本来、三部会を統括し取組の方向性を決定する上部組織が必要なのだが、これ以上会議は増やせない。各部会に校長・教頭・教務主任が所属し、この三者で全体を統括するという形を取ることにした。

Ⅲ 実践のあゆみ

1. 学びやすい教室環境の整備(構造化)

全教職員が特別支援教育の視点をもって指導に当たる。そのことを行動化するために、まず、教室環境の整備から取り組んだ。

発達障害の子どもたちは刺激に弱い。不要な刺激を無くすため、すべての学級で前面掲示の簡素化を申し合わせた。

また、一日の見通しを持って行動できるように、スケジュールを明示するようにもした。



その他、教室の構造化や、視覚情報を意識した掲示物の工夫など、学習や生活がこころよく進められる教室環境づくりに各学級担任が取り組んだ。

【教室環境の工夫例】



ロッカーに荷物を入れ方を写真で示し、その見本に従って入れる。(1年)



収納の形を写真で明示することで、ほうきやちりとりをきちんと取められるよう工夫。



提出場所を明示し、子どもが提出しやすく、また、自分のものを取りに行くときもわかりやすい教室環境にする。



教室のの構造化。
みんなで学ぶ空間と個別の学習スペースをはっきり分けている。
(特別支援学級)

2. 学年部会での実践交流

学年部会は、同僚間の学び合いの場ということを強く意識して創設したものである。この部会の有効性を各教員が実感できる内実を創りたいと思った。

【議題】

1. 各学級の現状と課題改善の手だて
2. 当面の諸課題についての協議
3. 三部会からの提案についての協議
4. ミニ研修

学年部会は、おおよそ左記のような議題の柱立てを進めてきた。

特に1の議題に関わって、特別支援教育の視点からの指導の工夫の交流や、取組の共有化が進むよう、教務主任や特別支援教育推進部会と連携しながら具体的な議題を設定してきた。

各教師の指導法交流の協議の内容について、その一部を5月の低学年部会記録から拾い出してみる。

【5/18低学年部会記録より】

「教師が動く」(K教諭)

文字練習のプリントをさせて、「できた子は前に持ってきてきなさい。」と言って教師がチェックする。ざらっと子どもたちが並んで待っている。一年の教室でよく見かける光景だ。

子どもたちが動くと、教室がざわつく。集中の弱い子はそちらに目が行ってしまったり、前に出て行く子どもが机にひっかかったりしてトラブルになってしまったりする。『並ぶこと』を学ばせるのも大切かもしれないが、今の時期は『学習』を優先したい。子どもに持って来させるのではなく、教師が回って、一人一人のできたところまでを○して行ってやれば、教室は静かさを保てる。集中が弱い子ども、できたところまで○をつけてやることで「よし、次もやろう」という意欲が生まれる。

「カウントダウン」(Y、T教諭)

- ・黒板に書いた漢字を書かせるのに、「10数える間に書けるかな?いくよ、1. 2……」

と数えると、どの子どもも夢中で時間内に書こうとする。

- ・子どもたちを席につかせるとき、「10. 9……」とカウントダウンすると、さっと席に戻ってくれる。

こうした、教室の環境整備の工夫や指導の工夫について、学年部会で交流し合ったものを、1学期末、「発達上の課題を有する児童への効果的な支援について実践事例」としてまとめた。この事例集は、滋賀県総合教育センターへも資料提供させていただいた。

(別添資料①)

3. 特別支援教育とリンクさせた授業研究の推進

学びに困り感をもつ子どもたちの視点から授業を分析することで「どの子ども分かりやすい授業」を創るための改善ポイントが見えてくる。昨年度の「発達障害児童生徒への指導力向上事業」の取組でそのことを実感した。今年度の授業研究もその方向で進めることを確認し、授業研究部で研究計画を立案、実践してきた。

■授業研究の事例① 「特別支援教育の専門家を講師に招く」

7月に1年生の授業研究会をもった。特別支援学級在籍児童5名も含めた国語科の一斉学習の場면을公開してもらった。国語科の授業研究とともに、通常学級における個別的支援のあり方についても考えたいということで、市教委の西野指導主事、八日市養護学校の岩石教諭の2名を講師として招聘した。



「きいてほしいな」という単元で、日常生活の中から課題を見つけて、1～3文のまとまった話をすることを指導目標とする授業だった。

指導案には特別支援学級在籍児童にとっての目標も併記し、一斉学習場面で課題のある子どもたちをどう支援するかの手だても考えての授業であった。

西野指導主事からは「話す・聞く」の目標の場合「誰に話すのか」という相手意識を明確にすることの重要性を指摘していただいた。また岩石教諭からは、板書やカードの効果的な活用など視覚支援のあり方についてご指導いただいた。私がねらいとしていた特別支援教育とリンクさせた授業研究のモデルとなる研究会になった。

(別添資料②)

■授業研究の事例② 「一人一授業 私の授業」

昨年度は、学年部ごとの全体研究会と学年1研究授業だった。しかし、教師個々の授業力を高めるには、少なくとも一人一授業公開は必要だと思った。そのことを研究主任に伝え、全員一授業を柱とする授業研究計画を授業研究部会案として立案してもらった。

残念ながら、自分の授業を公開することに消極的な雰囲気がまだ本校にはある。一人一授業を意識してもらえるよう、私自身も授業を公開することにした。5月初



め、5年生の教室で、山村暮鳥の「雲」という詩を子どもたちと読み合った。「一時間の学習の見通しを示す」「全員が動く学習」ということを意識してやった。いい授業とは言えないが、校長も授業研究の仲間の一員であることは伝わったかと思う。（別添資料③）

4. 特別支援教育主任からの情報発信

多忙な職務に追われていると子ども一人ひとりが見えなくなる。学びに困り感のある子どもたちへの配慮が欠けてしまいがちになる。意識の中に特別支援教育の視点を持ち続けるためには継続的な刺激がいる。

今年度は、特別支援教育主任が「特別支援教育便り」をほぼ毎週発行している。いろんな書籍の中から具体的な実践事例を拾い出して紹介してくれている。そのタイトルの一部を並べてみる。

- ・「障害のある子どもの理解と授業づくり」
- ・通常学級で求められる理解と支援～気がかりなのはその子？それともクラス？～
- ・正しい理解と適切な支援を ～支援はしなくてもいいから理解してほしい～
- ・安心感のある構造化された話し方の工夫
- ・一人の援助がみんなの援助
- ・学習不振児対応の学級づくり～個別対応の前に学級全体をきちんとさせる～
- ・一人にいいことはみんなにいい～特別支援教育を基礎とした学校づくり～

etc

特別支援教育は決して「特別」な教育ではないということ、学級全体を質の高い学習集団に育てることで課題のある子どもたちも落ち着いていくのだということを、いろんな事例をもとに啓発し続けていてくれる。

また、私もその方向を後押しする形で、週1回発行している校長通信には特別支援教育に関わる内容を意識的に書いてきた。

| | |
|--------|-------------------------|
| No.1 0 | 「どう対応したらよいか」それがみんなの問題です |
| No.1 1 | 「困り感」をもつ子を見つめる |
| No.1 3 | 「共同体感覚」を育てること |
| No.1 4 | 巡回相談の田代先生に聞く |
| No.2 2 | 日々の授業の質を高める |
| No.3 2 | もう一度指導の基本に立ち返って |
| | etc |

こうした継続的な情報発信により、本校職員の特別支援教育に対する意識の持続と理解の深化を図ってきた。

5. 特別支援教育支援員の実践に学ぶ

今年度、特別支援学級複数指導 1 名と市費特別支援教育支援員 3 名が配置された。市費講師 3 名のうち 2 名は 1 年の補助、もう 1 名は 2～3 年及び特別支援学級の個別支援にあたっている。課題の重い子どもたちに直接関わる立場にあり、日々試行錯誤の取組を続けていてくれる。毎週の勤務記録にはその具体的なエピソードが書かれており、そこから支援の原則のようなものも見えてくる。こうした支援員の仕事からもぜひ学んでもらいたいと思い、勤務記録から抜き出した事例を学年部会のミニ研修資料として出している。

学習に困り感のある子どもたちへの支援
～一年複数指導の T・H 先生の指導記録から～

4 / 14 (火)
算数の時間、S 君がまきわりの真似を始めた。「まきを横においとくね。」と棚に置くふりをすると、授業に戻ることができた

4 / 16 (木)
避難訓練。大きな音を嫌がる S 君がパニックになることが予想されたので、放送の前に「大きな音があるが心配しなくていい」「先生が手をつないでいるので、前の人についていく」と話しておいた。運動場までスムーズに行けた。

6 / 9 (火)
ミュージックフェスティバルでステージに並ぶとき、並ぶ位置を覚えるのが苦手な Y 君は困っている様子。明日は、Y 君と J 君のイスに目印を置いてみる予定。

6 / 10 (水)
成功。J 君のイスにも名前を貼っておいたらスムーズに座ってくれた。

6月23日（火）

ひらがな学習の時、「もう下手くそやー」などとぶつぶつ言っているB君。いつもの事だが、それはきくとそばに来て見てほしいという合図。なので、「見てください」と言ってくれたらいつでも行くよ」と伝えたところ、恥ずかしそうに「見てください」ということができた。これからもそれを続けていけるようにしたい。

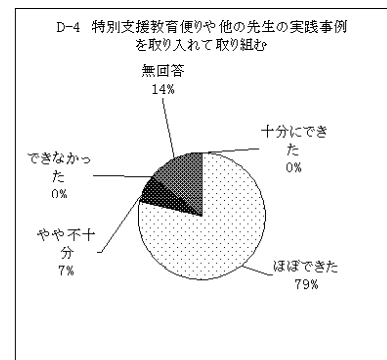
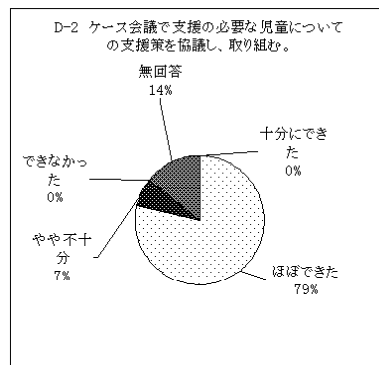
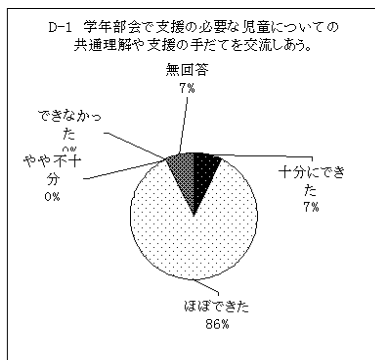
6月25日（木）

火曜日に「見てください」と言えるようになったB君は、今のところ「見てください」と言うことができてきている。まだ「イヤだ。」とか否定的な言葉も多いけれど「見てください」という時にはにかんだ顔を見ていると半歩だけでも進んだかなと感じる。

etc

IV 取り組みの成果と今後の課題

今年度の取組について、12月に中間の自己評価をしてみた。その結果は次のとおりである。

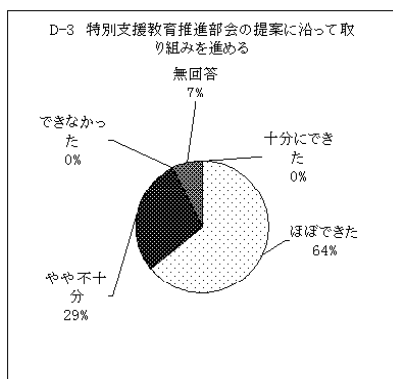


◎学年部会については職員の達成感が非常に高い。私が期待した同僚間の学び合いの場として、学年部会が有効に機能していると言える。

学年部会での交流を「実践事例集」としてまとめられたことも成果であった。

◎課題の重い子についての指導を検討するケース会議についても評価は高い。組織対応が有効に機能していると言える。

◎特別支援教育主任からの情報提供も教師の指導力向上に資する役割を一定果たせたとと言える。



●今年度から「特別支援教育推進部会」を設け、そこから指示、提案がなされ、全体的な取組を進めるという形を作った。しかし、まだその形で動き切れていないことがこの評価から見える。

部会からの提案が各学級の取組につながらないようにしては学校の変革はおぼつかない。その原因を明らかにし、改善策を講ずることが次年度への課題である。

V 終わりに

右の写真は外部から招いた講師の話聞く一年生の姿である。入学前、就学指導の対象に挙げられた子どもが全体の2割近くにもなるという学年であった。しかし、今、こんなふうに落ち着いた集団に育っている。いつ教室をのぞいても子どもたちの目がすつ



と担任に向かい、集中した柔らかな空気が流れている。1学期から様々な支援の手だてを取り入れ、担任と特別支援教育支援員が連携して取り組んできた成果を子どもの姿に見る思いである。

しかし一方では、昨年度安定していた学年が落ち着きを失い指導に苦慮しているという状況もある。学びから逃げる子どもたちの背景には体と心の成長のバランスの崩れや家庭的な問題があることは事実である。学校だけの取組には限界があるとも思う。だが、学びや集団から外れてしまう子どもたちが異口同音に「勉強が分からない」「先生は話を聞いてくれない」と言う事実を私たちは重く受け止めなければならないと思う。

今、本校は少しずつ変わろうとしている。少なくとも、昨年度よりは高みにある。今年度の成果を土台として、更に「教師力を高め合う学校づくり」に努め、「よろこびいっぱい、やさしさいっぱい、みんなえがおだ北小の子」の具現化をめざしたい。